

橘 菴 大人 撰
戲 坊 大人 撰
聽 風 軒 大人 撰



狂歌五十餘川

蘇州府志

卷之六

藝文志

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines within a rectangular frame. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of shorthand systems used for rapid writing. The lines are roughly parallel and fill most of the page's width.

泳

狂

おのゝりまの

おのゝりまの

おのゝりまの

おのゝりまの

おのゝりまの

西行

集川鈴十五

十三六九

春水園

おつけそと

さけそ日向の

栞西

人まあて

あつひ

十三六九

いつのろま

楓廻屋

おつけ清の

庭照

おや

華も

ゆけらて

六三六

竹の扶

サカヒ

和群居

つれておの

長樹

いせま

ちのり

つひ

十三三九

いせ日記

玉水園

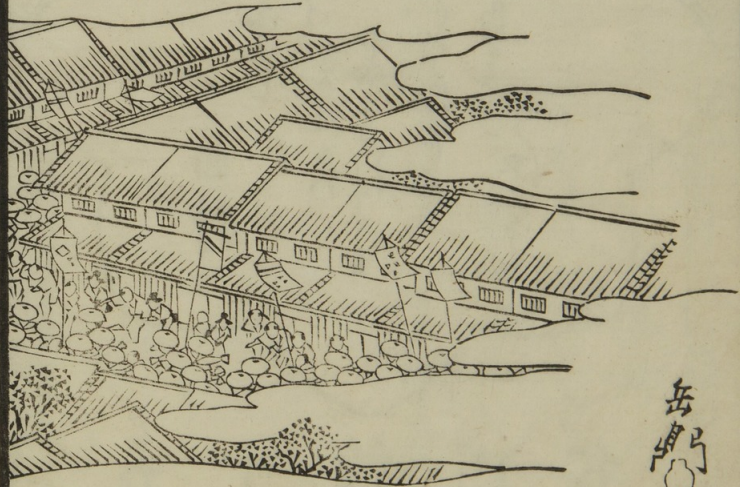
おまか

友光

おめ

い

お行場の水



ハ三三三
 び恩也
 ちあうらうら
 年積

水のこ

サカヒ
 蓬菜舎
 救めて抱行
 うらうら 赤宮

三三五
 ひまへの
 長樹

一むねも
 十ひ
 あ多つひ

えころろり
 非

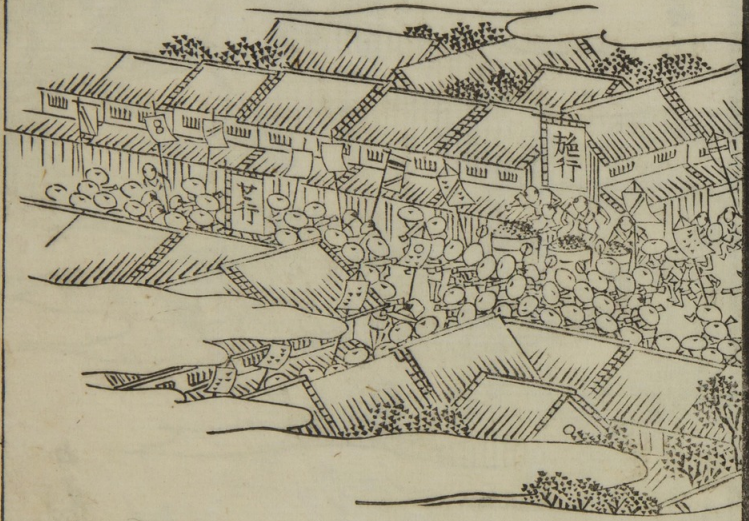
三三三
 花月樓

花の
 其糸

えころろり

ぬ死かて行

いせ
 赤り
 うま



十五六五 五
四隅うら

ままらく

庵

あまの

詩

いせ

あかり

神すあり

まろ

せ

〇三三

京 橋庵

神洛山

弦の速る

弓ゆて

ヤそちのうまの
まやとらせう

三五六

廣前子

久太楼

こふま

神の代子

たれひろこし

逆れこの香



島

十五三六

あまてらす

京

九箇舎

湖夫

孫の宮居

まごあらし

ふゆのぬひの木つらり

あらし

十五三五

法師ら

こころをかろ

つけひんの

かまのとうめ

あじとそぞろ

英景亭栗川

十三三三

太の

京

こころま

石原亭

せつや

廣庭

せいじん

くし

あめ

さくら

兼の

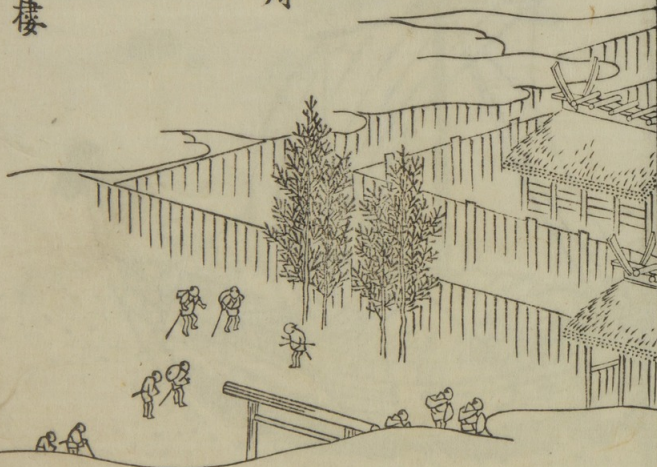
十三一三

わらわ

久太樓

あかり

ともね



十五六

鴉つりの

かきつりの

つげの

いせま

いせま

梳廻屋

三千九

十五六八

いせの

おつげ

てと

月廻屋

八五六

つと

いせ

おつげ

いせ

あ

あ

つと

九阜園

七十三七

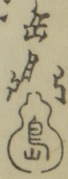
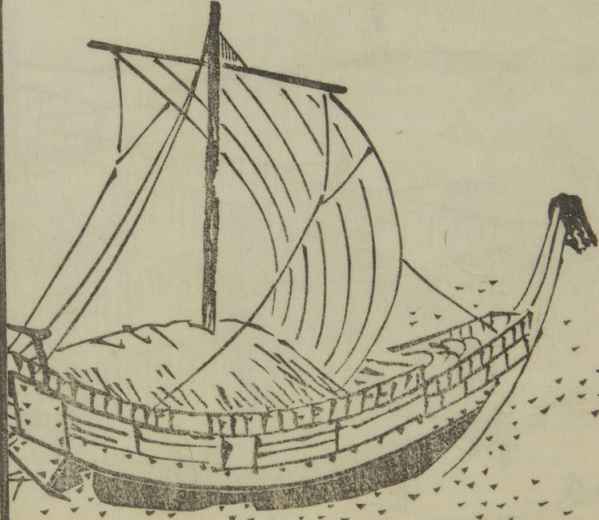
いせの

いせの

三千九

おつげ

あ



ナダ

松尾庵

亀亮

十五三七

りてり

隙の境

ゆきゆき

おひの枝

さくま

り

六六三

深萩

まろぬ風

りせま

あさひ

くさの

さくま

くさ

えい

月廼屋

十三八三

そのみ

松を

まの

あそ

あそ

あそ

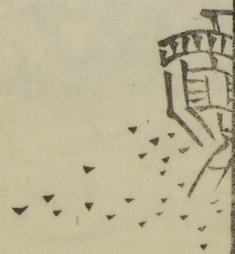
あそ

あそ

いせ

萩廼屋

音信



六十五

野一秋

笑廻屋

鬼陸

ねてのりてこれと

ゆけまうて

たまひのうらみ

寝むつらじ

五十三

なとらうの杖まきうれていせ路るる

藪うらひせもやまのうらみ

秋水園

五十三

赤を昏子

あつて井のけの

いんやう

ゆるまもあつての

りつ小倉

おる

三六七

こも井の

蝙蝠軒

あつてあつて

あつてあつて

二つあつて

あつてあつて



鳥島

一三五

こころを

かろおひを

ゆかそあま

いせを春より

みださうふる

ヤマト

標本

花丸

一三六

とらのねと

まゝそてあまけと

さうあめと

そらね

羅の

くひ人

ナラ

都月菴宵雅

一三三

ふたふね

花行の

なま

のせと

身の

さう

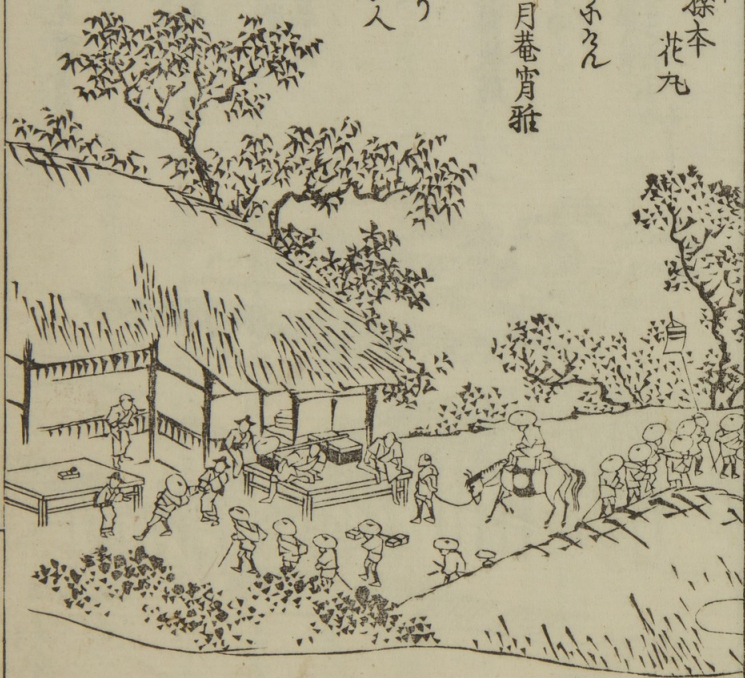
こゆ

松坂

ウチ

室廻屋

花丸



六五五 京 玉丸園寺美丸

主のまつり 小笠の

つむまき

草津のやとら

軒の夕月

六五五

空蟬の

ナラ

南園堂

わめりて

藤浪

旗まき

うつろ

うりや

まやごころ人

サカヒ

栗葉園歌集

七三三

ゆけ未あり

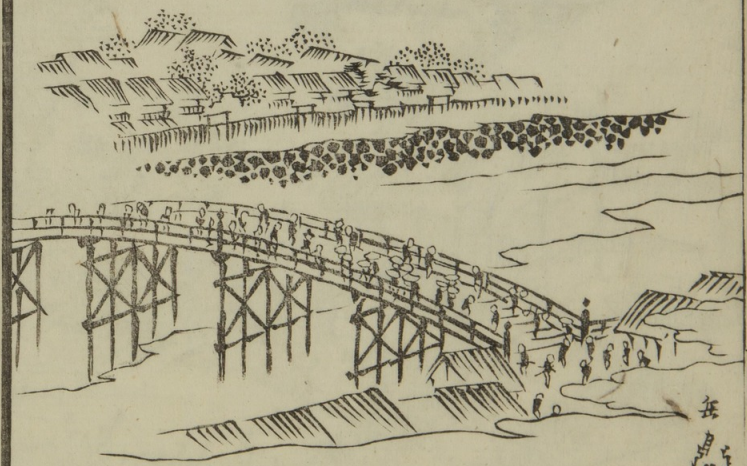
よもゆ

まろーみや

つちもゆなまら

まはら子

あ



五
舟
島

狂詠五十鈴川

あつけまうてとよめ

狂文をいそめいせもあつけまいけり残まつけりそめ紙サカヒ 聴風軒草浪

諸人のかゝけ泪因りても朱ふいそめぬいせの井垣 同

石の名のまかけまうてよあきぬん笠まてまうてれ灯籠 月廻屋丸碓

西ひびく岸の柳の女たち 知るくあゝそめ宮川のまじ 蘭廻屋枕三

いさ買んまやとのつと小栗原の柿葉まうてねど松坂のぼ 和群居長樹

山田かき津よひねつときとりくまこゑうくうそふ控ひるが 東巴人爲俊

宇治ちの柔の細のせりまきまの日布もついやして多 二重軒三重

おひくく柿ふあひぬる七夕の橋をさるくふ葎のさくら 一葉岡見松

ハ六三 志くす菊よたをう 蝶と道まかろ 下向のうささきむね枝 楓廼屋庭照

六八三 みるゆる二見のやとふ容むれてするかの人の裾をかきろ 玉水園友光

六八三 いせ指ぬいそむせう 伎へのひける 籠もこやわろし 葵園二葉雄

六八三 浪のうねちりし 下浮よとろつらん ぬみぢぬのこさきまろ 青海雲 長 樹

七五七 ろろくよおけ指のいせまろ 風のやとろのちの糸も嬉しき 竜廼屋弘器

六十九 さうれていささろろふまねぬ人まろや小町よ名ある玉つろり口 同

七六三 琴の音をむと松坂よやとんと 従をかまへてまひる 客人 舩廼屋容彦

七八七 牛杖もまてかろていきの宮ささちおやとちろくといひかへし 柏 樹 園

八七三 ぬけ糸家の柱の二親よ下向のちも手とあそびぬとい 庭 暎

十三三 びりるぬ 抜糸くもむろぬお太夫つねほろるるそ松のかけ 蟬 蛸 軒

五十六

このまの旅うらひとようれふちれ梅のさうらの奈宮の笠 京 玉兔園澄丸

八八九

笠ねけの府髪おちていつまうのかう人まさせぬいせぬ板 同

十五

青柳のいさけさきこすもきうつゆのさまわ板てひさけ羊 城

八八九

峯のゆる菱の小笠れまゝもいやくて近つく雨風のそや 友 窓

八六九

いせまうて日記をそけい筆先の坊まぬまよ紙ついで 友 顯亭炭丸

五十六

かゝる世子やうり未まをりいせ蛇あかりかゝるや此考け年 九 阜園鬢長

十〇八

物の名すかかさ ひまゝ 九 戲 坊

十〇八

同せとう哥 かふうけ ころん 同

十八六

さうの京さうらうちやそいせ清八重まうらと人をちあふ 九 阜 園

五十九

るけ浅の浪の老より年まうれおおきまう整まこころり 秋 水 園 落 霞

七十七 まうてつゝ國民草まむらつる露つるをかりあつるやつるの残 同

八十六 ららひれで腕うでやう遠とほふねねききくくる内うち外そとの宮みやけけちちののかかをを死 同

十八六 光陰ひかりのかげの矢やり立た夜よの道みちきき人ひとわわつつるるままけけももささららににああららて 釜 守

八六八 黒牛くろうしののそそののつつのの文ぶん字じののいいせせままややけけ万ま金かね母ぼもも泊とまりをを押おささり 庭 照

一十廿 ままれれままるるおおけけ赤あかまま人ひと里さとのの戸とささせせるる以も代しろももああててるるかかららり 鼎江 足 子

三六五 拔ひ糸いとききるるああののかかちちををああそそれれままてて括くわりりのの駕かままかかのの浦うら人ひと 西南宮飲居 小

八三二 妻つま交まじへへううけけししるるののいいせせままううてて脚かか半はんもも花はなのの杜と丹にううけけて 長 柵サカ

三六五 水みづ後ごののいいききききのの海うみ士しののうう海うみののううららままううててここららひひてて美み花はながが 五十瀬廻屋 一セ

六二五 ささららのの花はなのの白しろふふららこころろくくああららのの都みやこいいままささららりりああららまま未み宮みやけけ人ひと 九 鼻 園

五十八 ささららのの花はなのの白しろふふららこころろくくああららのの都みやこいいままささららりりああららまま未み宮みやけけ人ひと 同

八十五 國民を予えんをり於神垣やういひつゝのちを志すはる 月 廼 屋

十八五 かきとゆる筆さへよこまゆるちぬく人くろくむいせの省帳 同

十六七 志々縄の外ふ二尺のかり梳けしうりうきさるるもさきも 菊花園籬芳

八六九 千覆も脚半のあゝぬ抜赤り足手まといつれ 幼子 同

八六九 おうちうらあゝてやまきこのとまらあや例いさう立るゆん 幕 丸

八六九 ふし解しせんやしもおけゆいひる宛あくる二尺茶や 磐 松

八八七 ちむむけりる宛ねけ赤うあそれそて柳の枝のむまひいゆる 草廼屋妻道

十五五 妻ふ小軒の栗れこつとと志ちきせ後ふいせのかやふき 栗 川

十三五 あひ宿よ赤りのくろつものいそ道者まのと近はまろふ妻登 荦屋 仲吉

七十五 妻交へくいの老の管ら二夜もおけよあふこちとを井 庭 賢

十六五 さして森のあゝまをねけく木松の夜山を過るおけ并 松葉園香旭

十五七 網代木はあゝさる網子投浅いさよう浪と見ゆる宇治橋 長 柵

十六六 いせ清人のことりて松杉宿あゝた淡辺にまゐる地さる 同

十六六 おけとてさるひる店のまほさるるねりきね葉もるんえ 梅香園守近

十六六 ゆふとほれかろう神楽のまじ残は絞るね袖もおけけさる 童 廼 屋

七十五 尾花のく宮居の道の淡萩の音のぬ通るまゝさるる 同

十六六 いせちゆく旅うゝのほも来てまの梅のる名の明星の宿 胡蝶園差先

八五九 いま指さるる人との梅もきよき志めてや袖もさるるやとほれ 拍拵園仲垣

八六八 あゝの山 研まうてあさし繩の残さるるまゝぬうちよねけり 玉出園志平主

八六八 まり火歩出くやばるふ二見浮るのささるる烟立ちり 二水園双井

八八六 妻交のあひけ山ちまうつ〜くおまをたおむのかやとむ候 京 右京亭廣庭

七八七 天ろ〜は神のおうけの深口をさふ〜ぬきはかまけねあつけ カミ 西 南 宮

七八七 さつを川古川のへまひる餉ほろくめり〜さり〜さひる杖を〜 枕 三

七八七 るけの〜杖のの端あま〜こひ〜つひさくの底の抜てをりた 京 槌廻屋貞益

七八七 抜まのう二見の浦ま日の出まつま〜〜幟もあ〜ひさじり フシハラ 朝陽軒玉茂

六十三 おうけとて入いそれとも告さるをあそれたのいきをまうぬ サカヒ 長 樹

五十六 まるを字子かく浪を岸ハ手ろ〜ひの道ろ〜ほくふ抜垂る 京 燈 九

五十六 床の海こそさるもかさる古市の浪萩〜ねてぬる〜もちさる 同

十三八 のち早くぬけ〜は足のまち男何処もおうけのいせりの語 友 光

十三八 よろねと長うおひそて足弱の身ろ〜〜様なり入の津此町 菊 雅

十八三 字の糸そろうへ衣お若のあけ連極つちんとかさをもぬひたり 二葉 雄

八十三 ちやまらち宮のちうりゆきいつつやうららねせんも授さるる 九 阜 園

浪の花狂ふ二見の女夫岩蜂く雲の根あやまら非 十 竜 廻 屋

十五。 二見あて見むかへ取の笠あても一夜も志を 俄さるる 十一 聴 風 軒

五六十 金丹のころゆねくねと愁思の仙家うらうらあそふ 竜 廻 屋

五六十 けとてゆけくあつらふあそそ女のあもひもまらてなうら 磐 舟

十六五 物の名かたやあそめ 月 廻 屋

十五六 いきまわりくころもあねの目きくけのちりもさぬの尺屋あひ 見 船

五十六 天の戸のあけく近くひきけの浪の鼓や傍萩のあえ 桃 三

六十五 おのろ名よよのとかうき浪あそや貝月とひらねいきま珠 長 拵

六八七 暑日ハ身キきキぬヌくク入イ入イ出デ出デ汗アの玉タきキもモひヒひヒきキの津ツの狭ハ 同

ハ〇七 物の名 カカカひヒ死 モモモヤヤヤヤん

モモモモモモもモ常ト常トひヒ死シ袖スひヒ死シのノ死シやヤ太タんンのノ伯ハ姑ハとトちチ死シん

ハ八五 田タ田タとトうウらラらラ岸キのノ茶チ々々子コよりリさサひヒ子コ々々宮ミ川カのノ船フネ 季

ハ八五 三サ輪リンのノ山ヤマいイうウゆユまマちチんンおオうウけケらラまマらラぬヌいイあアらラとト思オモいイ女メ 長

ハ八五 ろロうウりリもモうウまマあアのノろロのノ山ヤマ道ミチをヲひヒらラぬヌけケ糸イトせんン 絞

ハ八五 水ミのノちチちチ何ナニくク川カハのノ外ソトもモあアけケらラしシまマつツとトれレあアんン 三

六六九 田タのノ急イやヤとトあアらラひヒ草クサのノ群グン集ジュあアらラむムとトりリ死シるルおオちチもモらラ 二

六八七 太タ神カミのおオうウけケひヒ串クシのノさサなナ死シのノ目メ川カハのノむムとトいイせセのノとトやヤぬヌ 秋

七八六 層ソウ気キ楼ロウのノ都トもモうウあアらラむムおオうウけケとトあアらラひヒぬヌとト路ロ 可

七八六 めメらラむムとトあアらラむム目メ川カハもモ田タかカのノとトあアらラむムひヒ串クシのノさサなナとトあアらラむム 季

石

右

秋

仲

園

朝

路

石

右

七ハ六
ゆきの糸つひありひめとて下川川をさしゆくこらあ通る國人 釜 守

ハ六七
屋下り木下の盆のゆき入の口をさしゆくつたよりの宮 五十瀬廼屋

ハ七六
いれの酒もあつたつてむ内外の糸の糸けさる 兼中トヤマ 素琴亭菊見

士三五
とて火の芯のつたつて燈明の天の岩戸のむらさきの梅 霄 雅

士三五
ささみ水あつたつての心太こらあつたつての宮 京 澄 丸

士三五
ぬけまありつたつてぬけつたつての表さ 敷 膜

十三七
ささみの皮を皮をむりちゆく枚もひと目干本 水 草

十三七
こらああつておつけのいせのこらあ満老もあやんの盤や松らん 京 五七菴 詩

十三七
らちぬきおつけ糸の家つたつて二見の目もぬけらる 京 廣 庭

十三七
むそち徑むり男の長生のおつけたつてあはれいきりの語 楳 丸

六五九
ふより二見の浦の宿をまておけるも来してゆくの福
松

七八五
おのひやゝ天の岩戸よりをこころとて曾あせり高宮の留ま
年サカヒ
積

七八五
百のくは八十のこや居く伏向ふひのの長途をぬけまおとち
九
阜
園

七八五
さび人ゆゝ三輪のやとちをぬかぬかとのまを門よりきり
播
广
呂

八五七
旅立ち身さらかへつゝ空蟬のうらまをたまきぬけし世道
城
窓

八六〇
舟よりのいのちのぬけのたれに旅人やとけうかき家もかゝる
取サカヒ
風
軒

八六〇
いさ通るたれに残のまはるゝてらゆりゆりあゝかゝ
同

六六八
いさ雲んん名もたさうゆひさく著ちとせをこゆら数らうのたれ
拍
拵
園

八六六
いさ借やとの群をあゆねねて帯さへとちぬつられ青海苔
庭
巖

八六六
いせまもさをとらう衣ぬおの友借風さへてをぬけく涼や
千代屋素雄三ノ太田

六八六
まや川のまよきまちて枚よりもおうけまありけ人のむま立 玉 度

六八六
あまま山花のくも間ゆ仙丹を買へてかうけのたけもえん 黒 人

六八六
歳丹まひさくき津のむまやちままくわくとのまあまこや 蝙蝠軒熨斗丸

七六七
あまつけて糸友もありかうけく道りまろた菱笠の雪 鬼 澄

七六七
二目まてあよりて目の家つら身りぬけてままほくら 釜 守

七六七
残るぬまうとやアんの一形のおまひつけて糸括りかこ 櫛 丸

七六七
宿もあてやちたたした煙州もも連のひのままつ二刃浮 梅 貫

七六七
ぬけまおけのいさくさけまおて宿まぬ軒ぬわらこまそ 秋 水 園

十一八
空おろりま玲麻の沢崎宿あつてより山まらぬひをまあり 二 紫 雄

十六三
おうけまこまふまりるあぬひあままもまへんひの 長金堂吉枝丸

西行^{十三}うこむは泪の^{十六}もろくもむせんて後^{十六}はみや川の^{十六}あま 賤^{十六}廻屋^{十六}菓^{十六}丸

神^{十三}風^{十六}ある^{十六}く^{十六}民^{十六}の^{十六}さ^{十六}ま^{十六}ち^{十六}ら^{十六}う^{十六}ゆ^{十六}ま^{十六}ち^{十六}の^{十六}や^{十六}と^{十六}ゆ^{十六}ま^{十六}ら^{十六}み^{十六}露^{十六}金^{十六} 双^{十六}井^{十六}法^{十六}師^{十六}

む^{十三}く^{十六}し^{十六}り^{十六}か^{十六}く^{十六}し^{十六}ち^{十六}り^{十六}ら^{十六}ま^{十六}け^{十六}く^{十六}ふ^{十六}つ^{十六}と^{十六}の^{十六}諸^{十六}國^{十六}の^{十六} 菟^{十三}廻^{十六}屋^{十六}奈^{十六}美^{十六}住^{十六}

お^{十三}う^{十六}け^{十六}と^{十六}ま^{十六}あ^{十六}の^{十六}ま^{十六}ち^{十六}男^{十六}妻^{十六}日^{十六}の^{十六}さ^{十六}ら^{十六}み^{十六}宿^{十六}を^{十六}か^{十六}り^{十六}ら^{十六} 栗^{十三} 守^{十六}

久^{十三}方^{十六}の^{十六}雲^{十六}津^{十六}の^{十六}川^{十六}よ^{十六}う^{十六}の^{十六}川^{十六}の^{十六}お^{十六}う^{十六}け^{十六}と^{十六}か^{十六}知^{十六}く^{十六}さ^{十六}の^{十六}月^{十六} 京^{十三} 帆^{十六}亭^{十六}日^{十六}廻^{十六}丸^{十六}

花^{十三}より^{十六}も^{十六}お^{十六}う^{十六}け^{十六}ま^{十六}の^{十六}ま^{十六}き^{十六}ら^{十六}り^{十六}て^{十六}御^{十六}半^{十六}の^{十六}杜^{十六}丹^{十六}つ^{十六}く^{十六}長^{十六}谷^{十六}の^{十六} 蟀^{十三}蟪^{十六}亭^{十六}庭^{十六}李^{十六}

荷^{十三}合^{十六}利^{十六}の^{十六}柳^{十六}や^{十六}花^{十六}の^{十六}粧^{十六}ひ^{十六}ら^{十六}ま^{十六}や^{十六}こ^{十六}の^{十六}人^{十六}の^{十六}お^{十六}う^{十六}け^{十六}ま^{十六}う^{十六}て^{十六}ら 枚^{十三} 門^{十六}

あ^{十三}く^{十六}ね^{十六}さ^{十六}は^{十六}日^{十六}こ^{十六}そ^{十六}あ^{十六}く^{十六}ね^{十六}と^{十六}と^{十六}音^{十六}の^{十六}岩^{十六}戸^{十六}は^{十六}あ^{十六}り^{十六}て^{十六}自^{十六}然^{十六}宮^{十六}奴^{十六} 峯^{十三}哉^{十六}野^{十六}外^{十六}丸^{十六}

腰^{十三}め^{十六}さ^{十六}は^{十六}柄^{十六}枚^{十六}へ^{十六}風^{十六}の^{十六}手^{十六}の^{十六}ち^{十六}ま^{十六}の^{十六}山^{十六}の^{十六}花^{十六}の^{十六}ま^{十六}よ^{十六}ね 槐^{十三} 三^{十六}

ま^{十三}ま^{十六}友^{十六}へ^{十六}く^{十六}お^{十六}う^{十六}け^{十六}の^{十六}つ^{十六}と^{十六}ま^{十六}き^{十六}ん^{十六}あ^{十六}り^{十六}て^{十六}つ^{十六}ら^{十六}水^{十六}の^{十六}こ^{十六}ま^{十六} 松^{十三}隣^{十六}亭^{十六}菫^{十六}友^{十六}

八六五 霄穿道をのそけり燈一火のひろり目あや明星茶や 全

八六五 いまわうく人つまうねといひやらん下向を程ふ事あむりの 文廻屋梅枝

八六五 宮柱つとく辛し林植よ木はれといふ僧をいみたり 瓢廻屋輕荷

八六五 むとまつくまよくまかへすおうけあく松もそよ波のたれ借成 長窓

八六五 道の記は初とうかこの外あるふまかたのまてけいまの旅 城窓

六五 けころのち秋おむもかころて落さくやもくあま赤く 友光

八五 ちおとわも小笠のまろまをそとれく飾へようてぬけ味つ 同

八五 ちうさくの月のかけき浪逢坂よ松影の弱もひくおけ羊 松廻屋千代丸

八五 ちうさくはとうへ衣碧の松影かそ十あへうもほる松坂の町 豊廻屋呉雄

五 ちの宿まけね養とぬま馬士よりも汗水まらば三空荒林 秋廻屋廉位

五 六八
いをまうて苗主のあはるまやまらせて是ゆぬをう猫の首玉 鬼 澄

五 八〇
まらうらう松坂こゑと菊の万ゆ千代か市のをうあは 聴チカヒ 風 軒

五 八六
赤社さいわくの人いつよりさるうかづねけ宮奴 頭ミタタ赤園宿権

五 八六
まや川み身を清めんと旅人のせおひこそを先うてう 音イセ 信

五 〇八
天の戸をおい開くま接荷物ちかきまこそか川地行まれ 戯 坊

六 〇七
ころゆゑ水のまや澄みちん清のあゝらささ宮川のみ 同 同

六 〇七
昔越をゆたゝ戻さうつとそとあひひのうせえても知ら 同 同

七 五七
七曲の玉つらうさうてねけまわらう川の浦より糸をひくと 菓 丸

七 五七
おけ赤あときたつくとけ登をとるまきと神やまきん 京 杯月舎満丸

七 五七
玉手とらうらうの浦のあゝらうあさ日よまきよほる浪 朝草菴露玉

ゆけまゝ七のうらたりのつゝゆたの梅のゆまのこまる初遊ナラ 頂星亭掘三

箕七ておめ七るちとのおかけのさな浅川いまの山田のとよの秋入ワカサ 雁返舎半月

演六萩を八かゝる五跡のかけ糸やよ浪花の人の足五を五やほ五う 枚 門

蛸七の六ま六り六ま六てかさのとうけま六たり 枕六宿六はるあれた家の内 同

枕七か六か六け六男の俄名も六ら六う六呼六い六ま六も六こ六も六ん六 十カヒ 毒廼屋亂義

国七の人のう六ら六ら六地震六より六ま六り六あ六ん六お六う六け六ま六り六 西側 種 廣

古七巢六あ六る六林の都六ら六う六ら六の月日と六お六き六 林六や六ま六は六ん六 京 万堯亭龜雄

海六老六の名七のい六ま六の宮川六さ六は六棹六ま六う六ま六か六ち六て六ま六は六み六も 庭 枝

弁六ぢ六の安宅七いとま六れ六関六の宿六枕六の杖六も六う六け六て六ゆ六け六ゆ六く 言 伎 此

玉六串六の天六々七う六ま六は六雲六津六川六つ六ま六た六ま六ま六ら六ぬ六ら六ん六 磐 船

六六七
たむむけを送る友のつとまきん柳こまひ水口細工フダハラ 五 度

士三三
ゆくりのいかくのことくうねけあふうひるまを居るは淀川上サ 揚柳亭直蔭

十三五
報謝宿あやちもろくねたもろい月直あけと引とら 同

一十五
あゝ坂やこの手をひけとつちとせくかへまなをる宿の衾 久 太 揃

一十七
のきの道遠れちうねのあけつろひまてろくもある日の外京 奥廼屋砂兄

七十一
赤宮み身いろつ蟬の軒端うろねまてくもねけむてろく 北窓 梅好

十五三
なまやうの真菱のぬ立の二文字ゆのまね杖をひく外ち山 黒 人

五十三
関といかうまやのあねと赤宮よまをまひとせり道中のほ 鬼 澄

五三十
いつようもまふまやねけとてひと月をくらゐる市のよね 三 重

十二五
旅人もむむつゝ垂とてそく船そく石の棹もあつては 六ナラ 青皴古篁

十一三五 道つきの支まぢあなは雲津川こまゝいさよみかきつ月本 童丸園玉笠

十三五 ようひももろくぬ道のぬけまうろかうまの八日の岡たて 見 恥

七六五 大いいのいや出まるとけとささねかき道のたて 同

八三七 姥餅かこんとしてまろも又かまろさうは中まの浅 二 紫 雄

八三七 烏より日の出さや二見浮貝もろつひろふ猿人 白水橋長三

八三七 二目ろと酢貝のこまろみち汝みろたあろ諸人のかき ぬ 草

八三七 いきまわりかさのまろ浪立田越らも人のこまろはろん 長 窓

八三七 味酒の三輪のろろろまろ道はひろろろとまろ立石もろろ 千 代 丸

八三七 天下の経路のけうけいさけ登のかきまろ月よいつろ諸人 十ラ 曉 菴 鐘 丸

八三七 抱くまの丸ゆる牛の頭もいせのいの字をいそをて用く 服 梅 守

八三七
あゝの京妻日のささもおつけとてけさういまのりの語を 言糸菴艶丸

八三七
かゝのけく 馳すおとめのまゝししやうけ 報謝の文字笠 京 数 災

六五七
かそへけ まろーえたうのりりりてまろふ本の子まろ子未完 蟀 蟪 亭

七六五
ぬけ未まろろろまろ子の様さーぬ言もむ母もまやふ求まろ 同

八五五
抜未くおろ野のま活を焼まやまろをのまて軒あつて 同

八五五
ぬけ出ろし 林のろおかお岡やまろまろのりてのて様ろろ 芙蓉亭 蟻 壊

八五五
久ろこの天照神のおけ道月本ふお川 明星の番や 同

八五五
おけけとてお川ま男やつろ一 旗のまろぬふもろまろいき道 戸田 麦 莪

八五五
けろい何しとろおへはぬけ未近知とろもまろぬまろく フハラ 去霞亭 日 廻 丸

八五五
さたけふん花んまろろまろおけけあいのまろくとまろろつらわろ 一竿亭 湖 遊

七六五 雪つ〜日あやま〜の道の持印ハ 波丁 玉丸

六七五 さ〜の都と〜いまの〜七日限の〜ませ〜や 何必栲一鱗 ヒニ子

六六〇 色このむ〜とらつ〜のちの〜のまやぬけてゆ〜き音 聴 風 軒 サカヒ

六六六 あけむつ六六六の國よう〜て朝ま〜伊達アハチのす〜のむワカサ未連 柿 廼屋 一成

六六六 心ま〜山い〜ねま〜ま〜〜ゆ〜火打ま〜ま〜ふ〜ふのね 正月菴餅丸 イセカトリ

六六六 わ〜ち〜さ〜こ〜さ〜む糖〜あ〜の赤丸の都道者〜 山樂亭素人

六六六 為人の〜ろ〜の花の〜た〜い〜〜のりま〜あ〜く〜た〜ゆ〜か〜 守 近

六六六 山く〜の〜あ〜か〜さ〜ら〜へ〜八ま〜ろ〜と〜搦ひ衣装ま〜ま〜ちぬ〜よ〜そ〜ひ 福良傳 田中可賀子

六六六 神ナラ登のひナラたひちた〜ぬ未清人組をま〜〜あ〜六り〜のやと 霄 雅

六六六 つ〜ろりぬのまのまや居のま〜〜と神つ代ありのまのまのま 湖 丈 京

十三三 大ぬきのみつうりくさいせちうも雲井のつらひ下りまはる 秋 水 園

十一二一 搦教ふ戸をこまおせうわろくの井のをまてふ日の大仏宮 宵 十ラ

十一三 一の文字のいきまきる道なきふら豆腐めかほろの廉 加 寿 成 駐

十一三 又平の筆のえふうぬけまうまやほおろくわらう大つ繪 卍 丸

十一三 浪花律の家つとまらうわーわーのさこやめくか入信萩の華 可 右

十一三 一十一三 じまやめうまあねの月もとたおろけまきま出らあろの夕暮 柀 三

十一十 一十一十 くらかうの戸をぬけあー丁雅うの峠をこそーこちあるん 柀 丸

追加

しきさくまういろうてつてのまや川や手こま結の花の水垢離 柀 京

おーはのぬ井風市めけくめりまこ出るとく人あまとうさ 戲 坊 菴

日の神のまほけのうらの彦も山姫といそんあゝた撥と 聽 風 軒

日つりの因をさへ入派あつた々々豊受神の雨風のまや ^{ナカヒ}長 樹

戸かゝの神や兩戸をかゝらんうらひるまぬいきの振ひ ^京澄 丸

おそくひのめうまゝはるはる因ふりと笠をさるまぬいき信人 ^{ナラ}菘 浪

松さうひの天々々まは神まさよあめまをさる河原の国 三笠菴其雪

唐までもおろけややらたの杖ふ千里の杖をたつし 鐘廻屋音成

朝まゝた立振人のまゝはるはる灯もきくあけの明星の宿 若草園芝廣

志借のやむまゝまゝしてつゝまゝまゝら五月のゆの屋やろ 吉 伎 丸

くゆるあの色さうさうた二見貝日の出からなとやまつん 柗 三

當座住吉詣 蛸蝠軒大人判
久太樓大人判

十五 漢萩と 秋水園

ちりりして
毒
るあひ女う
いぢらし足せ

ささるふ
まきしよ

十五 いせゆくりと
こゝろて小笠原

名とくらの

あしんせ
しつて
梅雪

せいせいの
詣

十五 花車
志賀丸

まきけあ
あひて
かゝさあひ

まのりさこ
あり
住よりの道

十五 志賀丸
赤詣の
ゆれ

あひ
あひ
あひ

あひ
あひ
あひ

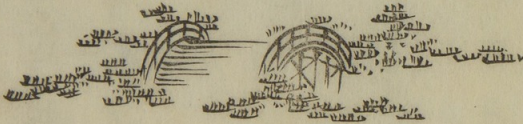
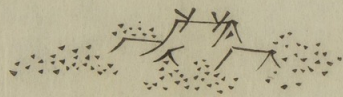
あひ
あひ
あひ
住吉

十五 二見あて

あてて
まきけの
まて打よさる

葎笠の道

酉水園校門



島

追加

さりりあに礼清をよまよりの月二見の朝見のほ

蝙蝠軒

しきりてう袖まらわつゆりよし筒をの神のぬきよ手向

久太楼

しをさうてせし収ひをあつとてこの

まやあらへあつつらあめを人のあつは

あれのいそやあのをくもかむ催しをほ

えつらうれきいあめえまつとて例の

友とち偽ひつやうひその道州をつむとふるん

ろえ来つるあひの山路のまへとらことま算あきり此姫松

月廻屋

狂咏五十鈴川 早

橘 菴大人撰
戲 坊大人撰
聽 軒大人撰

會主

文政十三寅秋八月

月 廼 屋
秋 水 園

書房

大阪中橋かを町

千里亭

扇屋利助

